

「かながわ人づくりコラボ2017」の実施結果の概要

- 1 目的 「かながわ教育ビジョン」第6章に基づき、教育ビジョンについて県民の方々と共感と共有を図り、様々な主体との協働・連携による「人づくり」をより一層推進するとともに、実効性のある教育施策に資する。
- 2 日時 平成29年11月3日（金・祝）13:00～16:40
- 3 場所 県立神奈川総合高等学校 多目的ホール
- 4 主催 かながわ人づくり推進ネットワーク、神奈川県教育委員会
- 5 参加者 353名
- 6 テーマ 「学校」と「地域・家庭」が連携した人づくりのために
～一人ひとりの行動による「参画・協働」の推進～

7 主な内容

(1) 開会（神奈川県教育委員会 教育長 桐谷 次郎）

開会の挨拶として、「かながわ教育ビジョン」の理念に基づく「心ふれあう しなやかな 人づくり」の取組み、県民との教育論議の機会である本コラボの趣旨とテーマ設定の視点などについて、話があった。



(2) 「かながわ教育ビジョン」に基づく取組みの実践紹介

ア 家庭教育協力事業者連携事業の取組み

（かながわ人づくり推進ネットワーク 幹事 湧井 敏雄）

「かながわ教育ビジョン」における家庭教育支援の取組み、企業による家庭教育支援の現状や必要性、取組事例などについて、発表を行った。



○ 発表に対するコメント

（東京学芸大学 准教授 柴田 彩千子）

企業の出前授業等が子どもたちの勤労観を育てていることや、企業による社員への家庭教育支援が家庭と仕事の両立につながり、社員のマネジメント力向上など「人づくり」に貢献していること、などのコメントがあった。



イ コミュニティ・スクール（以下、CS）の取組み

① 開成町の取組み（開成町教育委員会 主任主事 大澤 隼人）

幼、小・中学校での取組みとして、CS導入の背景や工夫した点、取組内容や課題、今後の展開などについて、発表を行った。



② 県立大和東高等学校の取組み（校長 熊野 宏之）

CS導入に向けた準備、取組内容、学校運営協議会委員や教員の声、導入による効果などについて、発表を行った。



○ 発表に対するコメント（日本大学 教授 佐藤 晴雄）

CSの利点として、①地域連携活動が継続できること、②資源と情報の共有化が図られること、③外から学校が見える「可視化」が進むこと、④学校が専門家の意見を受け止めやすくなること、などのコメントがあった。



ウ かながわ教育月間フォーラムの取組み（県教育委員会 教育参事監 折笠 初雄）

「県立高校生学習活動コンソーシアム」の取組状況や今後の展開、10月14日（土）に県立中央農業高等学校で開催した「かながわ教育月間フォーラム」でのワークショップの結果概要などについて、発表を行った。



(3) 教育論議

「『学校』と『地域・家庭』が連携した人づくりのために」をテーマに、具体的な提案や解決方策について、佐藤教授と柴田准教授とのトークセッションの後、次の登壇者からの課題提起や、会場からの意見等により、2つの視点で教育論議が行われた。

〈登壇者〉

- ◎佐藤 晴雄 日本大学教授【コーディネーター】
- 大澤 隼人 開成町教育委員会主任主事
- 加藤 一男 開成町立文命中学校学校運営協議会委員
- 熊野 宏之 県立大和東高等学校校長
- 柴田 彩千子 東京学芸大学准教授
- 吉田 勝明 県教育委員会委員
- 湧井 敏雄 かながわ人づくり推進ネットワーク幹事



ア トークセッション

- 「家庭教育と親子関係に関する調査研究（日本教材文化研究財団）」の調査結果から、親の学校関与率（学校行事に参加、PTA活動に積極的など）が高くなると、子どもの自己行動認識（親の言うことを素直に聞く、ルールを守るなど）が高い子が増える傾向があり、また、地域との関わりを持つ子どもの方が自分に対して肯定的な認識を持っている傾向がある。そういう意味で、学校と地域の連携が大事になる。
- 同調査結果から、核家族化が進んでいく中、上の世代、地域の先輩の子育ての知恵の継承よりも「ママ（パパ）友ネットワーク」など、横のつながりが強い傾向がある。

イ 視点1（家庭教育支援の推進）

- 企業の立場からは、家庭教育に直接手を出すことはなく、その前提条件となる家庭での子どもと両親がふれあう時間を増やすことが必要と考えている。企業主催の運動会などを通じ、自然に親とその親を取り巻く社会に子どもが触れる機会が提供されていると思う。
- 自治会がリードして学校の防災訓練を続けていくことで、中学生の参加が増えてきた。そして、参加した生徒の取組みを地域全体で拍手でほめてあげることで、生徒が自信を持つようになった。
- 全国各地で家庭教育支援の学習機会があるが、各家庭に情報が届かない現状がある。そうした課題を解決する装置の一つとして、CSに可能性がある。



- DVなどの家庭環境がある中、家庭だけに教育を任せておくには限界がある。家庭の中だけでは孤立してしまうので、地域が子どもの周りで支えながら孤立させないことが一番大事である。

(主な意見) ◇会場からの意見、◆登壇者からの意見

- ◇ 地域の人が、よその子どもにも関わることのきっかけやコツを教えてほしい。
- ◆ 中学校に「おやじの会」という組織を作って活動している。自治会と同じように登下校の見守りなどを行うことで、生徒たちとお友だちのようになれば、地域も安心感を持ってもらえると思う。
- ◆ 「声」と書いたバッジを関係者が付けて、声かけをする雰囲気づくりをした。
- ◆ 地域ぐるみで、みんなで声かけあって挨拶をする。そこからスタートをして雰囲気を作るのがよいのではないか。

- ◇ 高等学校の場合には学区がないが、地域をどう捉え、地域の力をどう活用しようとしているのか教えてほしい。
- ◆ 高等学校の場合は、それぞれの学校のミッションやニーズによって地域の捉え方が違ってよいと思う。大和東高等学校でも防災の取組み（学校周辺）とキャリアプログラムの取組み（大和市周辺）では地域の捉え方を変えている。それぞれのテーマによって地域の範囲は柔軟に考えるべきだと思う。

- ◇ 東京五輪に向けて英語以外の言語も学んだ方がよいと思う。
- ◆ 生徒のニーズに応じて、機会を作るのが地域や学校の役割であると考えます。
- ◆ 外部人材の活用で、子どもの人的関係の広がりも期待できる。

ウ 視点2（「学校」と「地域・家庭」の連携）

- 社会が求める力として「チャレンジ精神」、「考え抜く力」、「コミュニケーション能力」の3つは、学校だけではなく、地域、家庭、企業などでいろいろな形で教わった方がよいと思う。また、子どもやお年寄り個人、家庭ではなく、地域でみていく時代であると考えます。
- 今の高校生は、親と先生以外の信用できる大人と話す機会が非常に少ないので、CSの仕組みを活用して、信用できる地域や外部の大人とつなげていくことを意識している。
- 今後、全ての県立高等学校でCSを導入する際、どこの学校でも必要となるのが実践的な防災・減災の取組みである。CSに地域の方と一緒に防災に取り組む部会を作って、学校が地域防災拠点とつながることも必要であると考えます。
- 開成町ではこういう子どもたちを育てたいという理念がある。CSを設置して次の日から特効薬のように急に何かが変わることはない。理念を持って長く続けていく中で大きな効果を生むものと感じている。
- 学校と地域の「Win-Winの関係」の構築のなされ方が今後の課題。学校運営協議会委員の方が疲弊しないような心遣いも必要。できる人ができることをできる時に学校協力するという支援体制の構築も必要である。



(主な意見) ◇会場からの意見、◆登壇者からの意見

- ◇ 学校と家庭、地域が関係を深めて学習環境を整えていく意見交換の場に、生徒の意見はどのように反映されているのか。
- ◆ 生徒から簡単なアンケートをとっている。また、改善してほしい点、こうなるといいなといった点などは、生徒の声を取り入れて改善していきたい。
- ◇ 大和東高等学校の学習サポートは、数学や英語の授業が少人数で行われているので分かりやすい。また、防災訓練に地域の消防士が来て蘇生法などを教えてくれることは地域との関わりのおかげだと思った。
- ◇ 大和東高等学校のボーダーカフェでは、ハロウィンの「かぼちゃランタン」作りなど、家ではできないことができたり、カフェをやっている地域の話も聞けて楽しい。学校の中に地域の人が入ってくることに抵抗感はなく、もっと関わりたいと思った。

- ◇ 学校ではADHDで授業を抜け出したりしている子どもが、学童保育では低学年の面倒を見るなど頼りにされている。学校と学童保育が良好な関係をどう築いたらよいか教えてほしい。
- ◆ ADHDなど障害のある子どもも含め、全ての子どもが同じ教室で、共に生きるというインクルーシブ教育という考え方があるので、これを頑張ってやっていきたい。その学童保育では、子どものよいところを見つけて伸ばそうとしているから、子どもも落ち着いているのではないかと想像する。

- ◇ 「おやじの会」というネーミングによって、参加したいお母さんなどが参加しにくいのではないかと。
- ◆ 「おやじの会」がそのように見られているとは知らなかった。学校や地域の方の意見を聞いて、検討したい。ちなみにどんな名前がよいか。
- ◇ 「子ども応援団」のような、子どもを応援してくれそうなネーミングだったら、誰でも参加しやすいかなと思った。

エ 今後の取組みの方向性

- 子どもが育つ社会、子どもが自ら育とうとする社会を作るのは、周りにいる大人たちである。子育ての環境というのは、その子どもがどういう大人に家庭や学校や地域の中で触れ合ってきたかということ次第、その環境そのものだと思う。そうした中で、CSという制度は地域の学校応援団を増やす、補強するという、大きな役割を持っているものだと思う。
- そして、CSが、学校応援団に賛同してくれた方の生き甲斐や生涯学習につながるような活動として、賛同してくれた人にフィードバックされていくような、そういう社会と学校との「Win-Winの関係」が構築されていけば、よりよい社会になるのではないかと。
- 家庭の限界というものがある。そして、それを支えるのがやはり地域であろうということだが、昔に比べ第三者である地域の教育力が弱まっている。
- そうした中であっても、第三者の教育力に期待するしかなく、CSというのはひとつの核になる。CSがないと、私たちはどう地域に関わっているのか、地域の住民が学校に、子どもにどう関わっているのかというきっかけがない。その辺でCSというのは、ひとつのきっかけ、仕組みになると考えられる。



○ そうした中でも、家庭に対していくつかの支援が必要である。これは社会学者のハウスという人の四つの社会的支援についての話であるが、これがヒントになる。

一つ目が情緒的支援。気持ちの支援である。あいさつ、励ます、頑張れよ、おはようでもよい。

二つ目が、道具的支援と訳されるものだが、物の支援である。移動を手伝うとか、物を貸してあげるとか。たとえば、子どもの遊び場を提供するとか。そういうものが入る。

三つ目は、情動的支援である。インフォメーションのこと。教えてあげるということである。これは、情報の共有化によって、新しい情報が入ったらこれを学校運営協議会が先生に伝える、地域に伝えるというものもある。

四つ目が評価的支援。子どもをほめたりしかったりというようなことである。よく、子どもの行いがよいときに、表彰したりするが、そういうこともCSでやっているところもある。また、よいところ探しとか、そういうこともやっている。

このような四つの支援というのは、これからのCSにも期待される。それが跳ね返って家庭の教育力の向上につながるのではないかと、思っている。

(4) 閉会（かながわ人づくり推進ネットワーク 幹事長 内藤 昌孝）

閉会のことばとして、教育論議では、会場から小学生、高校生、大学生なども熱心に参加いただき、活発な論議を展開することができたことや、「かながわ教育ビジョン」を始め、本日のコラボで熱心に議論された内容、そして「かながわの教育」への期待を一人でも多くの方と共有し、本日を契機に教育ビジョンの更なる推進に向けて、一人ひとりが「連携・協力」から「参画・協働」へと、かながわの人づくりを進めていくこと等について、話があった。

